「日記」という名の小説

Nicholas Nickleby に潜むモノについて

渡部智也

1839 年 10 月 5 日、小説 *Nicholas Nickleby* の完成を祝う晩餐会の席上、スピーチに立った Charles Dickens は、同作が自分にとって「ここ 2 年の日記」(“a diary of the last two years”; Macready 2: 25)だったと述べたと言われている。この小説の主要な執筆目的が、当時ヨークシャー地方に見られた、親に望まれない子供たちを集めて虐待する寄宿学校(以下、暴力学校と記す)を批判することにあり、作中に描かれる学校 Dotheboys Hall とその校長 Squeers が、Dickens 自身が視察した学校とその校長の姿、有り様を映すものとして描かれたことを考えれば、本作は確かに彼の体験がよく反映された作品と言える。しかしながら、この「日記」という言葉からは、彼が見聞きした物事という以上の、より個人的な何かが存在しているように思われる。彼が自分の作品を「日記」という言葉を用いて表現したことは印象的ではあるものの、これまでこの「日記」はほとんど批評家の注目を集めてこなかった。本発表では、Dickens が「日記」という言葉に込めた意味と思いの正体を、特に重要登場人物の一人である Smike の描写に焦点をあてて考察する。

冒頭で述べたように、Dickens が本作品を執筆した主な目的は、当時ヨークシャーに見られた暴力学校を批判することにあった。このことは、彼が実際に現地へ学校視察に行っていたという事実からも明らかである。彼は 1838 年 2 月 2 日付けの日記の中で、Squeers 校長のモデルとなったと考えられている悪徳校長 William Shaw に会ったと述べ、強く想像力を刺激されたことを示唆している。また、視察した学校近くの墓地で見かけたある少年の墓石から Smike の着想を得た(“his ghost put Smike into my head”; *Letters* 1: 482)とも述べている。彼はこの少年を、学校での虐待の末に亡くなったのだと同情的に捉えており、そのような少年をモデルにした Smike が、学校批判の材料として生み出されたということは明らかであろう。さらに Dickens は Smike を知的障害を負った存在として描き、その症状が学校で生活していくうちに徐々に酷くなっていったことを示唆することで、学校批判の意図を先鋭化している。

このように Smike の描写を通して痛烈な暴力学校批判を繰り広げる Dickens であるが、物語の中盤、突如としてその Smike の描写に学校批判とは異なる要素が混ざり始める。主人公 Nicholas は、Smike を連れて学校から逃げた後の第 20 章で、Squeers と手を組む叔父の Ralph から Smike を学校へ返すようにと要求される。しかし彼はその要求を一蹴し、Smike をこのような苦境に追いやった人物、すなわち彼の父親を糾弾する(“I would that I knew on whom he has the claim of birth: I might wring something from his sense of shame, if he were dead to every tie of nature”; 252)。ここで見逃せないのは、目の前にいる Ralph こそが Smike の実の父親であり、この場面では読者の気づかないところで、息子を苦境に陥れた父親に対する痛烈な批判が展開されているという点である。

Dickens 作品における父親批判の描写を考えるとき、作者自身の経験を無視することはできないだろう。よく知られたことではあるが、Dickens は幼い頃、父 John の借金が原因で、両親は債務者監獄に入れられ、彼自身は労働者階級の子供たちと一緒に Warren 靴墨工場で働かされた、という経験を持ち、このことが彼にとっては一生残るトラウマになったと考えられている。一方で、その後債務者監獄から解放されたものの、彼の父がその後も生活態度を改めることがなく、度々借金を重ねて Dickens を困らせていたという点は意外と知られていない。Edgar Johnson によると、*Pickwick Papers* で Dickens が成功を収めた 1837 年から、John は Dickens の出版社である Chapman & Hall 社に頻繁に借金を申し入れるようになり、特にこの *Nicholas Nickleby* の発行が開始された 1838 年の前半には、再び借金で捕まったほどであった(1: 256)。相も変わらず不甲斐ない父への不満がこの時期の作品に投影されていたとしても、それ自体は驚くことではない。だが、それまで学校批判の材料として用いられていた Smike の描写に、なぜ父親批判という要素が新たに加えられたのだろうか。

この問題を考えるためには、本作の出版形態と各章の執筆時期を把握する必要がある。本作は Dickens の得意な月刊分冊形式で出されたが、彼の手紙や親友 John Forster の証言などから、彼は各号の内容を出版ギリギリまで書いていなかったことが分かる。彼は出版社の Chapman & Hall 社と、各月の 15 日までに原稿を渡すという覚え書きを交わしていたが、早い段階でこの約束は果たせなくなり、なんとか各月 20 日に間に合うように努力をしていた、というのが実情だった。問題の Smike の描写が見られる第 20 章は、1838 年 9 月に刊行された第 6 分冊に含まれている。従って、同年の 7 月 20 日過ぎ頃から 8 月 20 日前後の間に書かれたと考えられ、この時期の出来事に注意を払う必要がある。山崎勉は、8 月上旬に Dickens がジェントルマンのクラブとして知られる Atheneum Club の新会員としてその会合で紹介されたことで、上り詰めたという意識が強くなり、

翻って自分の足を引っ張る父親に対する嫌悪感が強まっていたと指摘している(62-3)。しかし現存する Dickens の手紙や日記では、このクラブに選出された後のことがほとんど言及されておらず、彼がどの程度このクラブ会員になったことを誇りに思っていたのか、定かではない。むしろ、Dickens が特にこの第 6 分冊を書いていた時期に、自分の過去と父の事を振り返らざるを得なくなった別の出来事がある点に注目すべきだろう。彼は同年 7 月末、求めに応じる形でドイツ人作家の J.H. Kunzel に宛てて自身の来歴を知らせる手紙を書き、その中で"I had begun an irregular rambling education under a clergyman at Chatham, and I finished it at a good school in London—tolerably early, for my father was not a rich man, and I had to begin the world." (*Letters* 1: 423)と述べている。「父が金持ちではなかったため早くに学校をやめた」という一節は、その背後に伏せられたものの大きさを強く感じさせる。この手紙に記された来歴は Dickens にとっての「最古の履歴書」("earliest resume"; Allen 1)であり、この手紙を書くという行為は、彼にとって初めて自分の過去を細かく振り返る機会だったと考えられる。そのような機会を得たことで、彼は必然的に、今なお自分を苦しめる自堕落な父のことを再び強く意識し、その事がその少し後に書かれた第 20 章での Smike の父親批判に繋がったのではないだろうか。

実際、この後も作中の Smike に関連した描写と、Dickens が現実に抱えた父への不満とが、奇妙に連動している。12 月発行の第 9 分冊に含まれる第 29 章で、Nicholas は自分の家族について Smike に話をするが、その際に Smike が実の父親 Ralph を知らずに「敵」として認識しようとする印象的な場面が描かれる。一方、この章を書いていたと思われる 11 月中旬、Dickens は Forster 宛の手紙の中で、親類に対する父の借金を返済した事を不満げに述べており、執筆時に再燃していた父への強い不満が直接的に作品に反映された例と考えられる。

Smike はその後一度 Squeers 校長らに捕まるものの、逃げ出し、Nicholas らと涙の再会を果たす。それらの場面は 1839 年の 2 月から 3 月にかけて書かれたものであるが、これは、Dickens が再び借金を重ねる父親をロンドンから追い出し、デボン州アルフィントンに下宿させることを決め、それを実行に移した時期と符合する。両親をロンドンから追い出して問題を解決した後の時期に、無事に逃げ出した Smike が Nicholas らと再会して喜び合う場面が描かれる、という展開は、非常に示唆的と言えよう。実際、この Smike の描写と前後して現れる Nicholas の母の台詞や、Tim Linkinwater の語る足の不自由な少年の逸話には、Dickens 自身の靴墨工場時代を連想させる表現が用いられ、彼が父親を追い払ったことで解放感を感じていたことが窺えるのだ。

Dickens の父は 1840 年代に入って以降も息子を困らせ、挙げ句ロンドンに戻ってくることになるが、Dickens 自身が 1840 年 7 月 31 日の Forster 宛の手紙で、"They seem perfectly contented and happy"(2: 109)と述べているように、引っ越し後しばらくは落ち着いていたと考えられる。自然と Smike の描写を通しての父親批判も影を潜め、Smike は穏やかに息を引き取る。一方第 59 章で Ralph の数々の悪事が露見した後、それでも彼を救いたいと言う、Dickens と同じ名を持つ善人 Charles Cheeryble 氏は Ralph に対し、血縁者に罰せられ、辱めを受けるのは見ていられないので、どうかロンドンを離れて欲しいと訴える。この姿はまさに親族＝息子である Dickens によって、ロンドンから追放された父 John の姿に重なるだろう。この台詞を通して、Dickens 自身もまた、ロンドンから追い出した父に、悔い改めてより良い人間になって欲しいと願っていたように思われるのだ。

本発表冒頭に言及したスピーチについて、William Macready は、「Dickens のスピーチはいつもほど良くなかった」("Dickens was not so good as he usually is"; Macready 2: 25)と述べている。なぜ「いつもほど良くなかった」のだろうか？「本作は自分にとってここ 2 年の日記だった」、と口にしたとき、自然と Dickens の脳裏には、本作の背後に潜む自分の父への不満、そして自身のトラウマに関わる暗い記憶がよみがえっていたのではないだろうか。そのような状態で、出版記念パーティーにふさわしい、愉快なスピーチができるかと問われれば、難しいと言わざるを得ないだろう。「いつもほど良くない」彼のスピーチは、この *Nicholas Nickleby* という作品の抱える問題を、まさに体現しているのである。

参考文献

Allen, Michael. *Charles Dickens's Childhood*. Palgrave Macmillan, 1988.

Dickens, Charles. *The Letters of Charles Dickens*. Edited by Madeline House, et al. Clarendon Press, 1965-2002. 12 vols.

---. *Nicholas Nickleby*. The Oxford Illustrated Dickens. Oxford UP, 1987.

The Editor of *Dickensian*. "A Dickens Diary 1838." *Dickensian* 37.1 (1940): 19-33.

Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. Charles Scribner's Sons, 1905. 2 vols.

Johnson, Edgar. *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*. Simon and Schuster, 1952. 2 vols.

Macready, William. *The Diaries of William Charles Macready*. G.P. Putnam's Sons, 1912. 2 vols.

山崎勉. 『ディケンズのこころ』英宝社, 2003 年.